

島田三枝子さんを偲ぶ 二〇一五年二月十八日（葬儀告別式）

はじめに

島田三枝子さんと私は、一九八七年十月に東京YMCA英語学校聖書クラスで出会って以来二八年間の長いおつきあいですが、決してよく存じあげているわけではありません。他に私なぞよりよく島田さんをお知りの方が多数いらっしゃるでしょうに、ご指名をいただき恐縮しています。共に聖書を学んだ主にある友人のひとりとして、島田さんの三つの面について申し上げたいと存じます。

一．「良い学徒 a good student」としての島田さん

英語のクラスで一緒でしたので英語で言うのをお許しください。島田さんは実に「グッド スチューデント」でした。私どものクラスは、はじめは英語学校の中の一つのクラスで、その学校が閉校になってからは市の中の自主的勉強会として続けられたのですが、一貫して次のような考えをもとにしていました。私の信仰の師である内村鑑三の次の短文をもって表明することをお許しください。

「聖書を読んで、永久の利益がある。聖書を読んで、人は老いて老いない。彼の心に永久の春がある。聖書を読んで、理想が尽きない。詩と歌と音楽とはその必然の結果として、わが口より流れ出る。聖書を読んで知識欲が増す。宇宙と人生とについて広く深く知らんと欲する欲求がわいて尽きない。もし世に神の言があるならば聖書を措いてほかにあるとは思えない。人類の所有のうちで最も貴いものは書籍であって、書籍のうちで最も貴いものは聖書である」

島田さんはこの聖書を実によく勉強されました。勤勉に（いつも必ず予習して）、謙虚に（講師や級友の言うところもよく聞いて）、誠実に（疑問を怖れず、率直に）聖書を学び続けられた、文字通りの「グッド スチューデント」（聖書学徒）でいらっしやいました。島田さんが、聖書に限らず何事にも研究心旺盛な勉強家であったことは、万人が認めるところでしよう。

二 「良い文通者 a good correspondent」としての島田さん

これも多分多くの皆様がお認めになることと存じますが、島田さんは実に良く手紙を書く方でした。美しい文字で心のこもった達意の文章の手紙を、それも上品なステキなカードや絵葉書を使って、お届け下さいました。良い文通、本当の *correspondence* は決して単なる知らせ、用件ではなく、この字義通り「対応、一致」、すなわち文通は「愛の交換」なのです。私どもは文通によって互いの友情を深め、慰めと励ましを共にします。新約聖書の大きな部分が書簡（文通）であることも、うべなるかなです。「良いコレスポンデント」の秘密は、彼が「隠れたところにおられて、隠れたことを見ておられる」（マタイ六・六）御方の愛の呼びかけに対して、たえず愛と信仰をもって、誠実にレスポンスする「レスポシブル・セルフ」（応答する責任主体としての自己）であることにあります。

三 「良いクリスチャン a good Christian」としての島田さん

創世説話によると、神はアダムに「どこにいるのか」と問われました（創世記三・九）。島田さんはこの神の問いかけに、レスポシブル・セルフとして、生涯誠実に応答しつつ歩まれた方でした。それが彼女を「良

いクリスチャン、本当のクリスチャン」にしたのだと信じます。「物心ついたところから何か漠然とではあるが、人間を超えた大きなものの存在を感じ、またそれと、こころ秘かに対話していたように思う」と回想する（『英語聖書クラス文集2010』寄稿文から、以下同じ）島田さんは、二十歳の時ルーテル教会・学生センターで受洗されました。（その後結婚、引越などでも母教会を離れた時期もあったが、自分は洗礼を受けた人間で、その生き方を神に従うと誓った人間であるという拭い切れない事実には、想像以上に捕らえられていた。ために、ついに、一九九二年に本郷の母教会へと戻ることができた）。その時の思い出を島田さんは讚美歌252番に託し、「私は礼拝でこの歌を涙なしには歌えない」と言っておられます。

1 主よ、今我が身は み前にひれふし み恵みたのみて ひたすら祈れば 赦しの御声を きかしめ給
えや

2 さ迷いでたる きよわき我をも つきせぬ愛もて み許にひきよせ 砕けしところに 安きをたま
えや

3 主よ、主の御恵み うけたるわが身に み神をおそるる 聖なるおもいと 再び背かぬ 真実をたま
えや

この教会復帰にあたって、「強烈に聖書を学びたい思いにかられて」YMCA英語学校のバイブルクラスにはいられ、当時講師としてそのクラスを担当していた私に出会われたのでした。先程申したように学校が閉校になってからは、自主的な市中の勉強会となりましたが、一九九六年から昨年末までの一八年間、島田さんは一貫して会場係りとしてこの文京区内に、シビックセンターなどの手配、会場の手配をして下さいました。彼女はクリスチャンらしく常に「仕える者」でした。三年前の二〇一二年四月二十二日に、最愛のご夫君忠光さ

んが重篤の病床で、安井牧師先生の司式によって洗礼を受けるに至られたことは、彼女の熱い祈りが聴かれたことで、どんなにかうれしく、こころやすまることであつたらうと存じます。島田さんは今日のこの日の近いこと予知しているかのような文章を私どもに残して下さいました。安井先生のお勧めとご指導によって教会で証言されたという、お話がこの告別式の式次第の末尾に「信仰の証言」として掲載されていて、まことに有難く存じました。ここに（グッド・クリスチャン）島田さんがいらっしゃいます。

終わりに

私が島田さんに最後に、お目にかかったのは、二月一二日の午後でした。日医大付属病院での治療は少々つらかったようで、ご夫君忠光さんと同じ駒込病院の緩和病棟に転院ができて、とてもいい、安心したと喜んでいらっしゃいました。しかし、家では冷暖房は使わないと言われるほど、クラスにもさつそうと自転車に乗ってこられる、誰よりも、お元氣な島田さんの姿（その姿に私は「良い知らせ（福音）を知らせる者の足は、いかに美しいことか」（イザヤ五二・七）の句を思ったことでしたが）はもうそこにはありませんでした。思ったより早く病状は進んだようでした。でもしっかりとっておられて、あれこれの話を楽しまれた後、私が詩編二三を讀み、祈りを共にしました。そしてお互い英語で「ゴッド・ブレス・ユー！・ザ・ロード・ビー・ウイズ・ユー・オールウェイズ！」と申して握手をしました。彼女は細い声ながら「アイ・ホープ・ソウ」としっかりと応じられました。その三日後、彼女はご家族に見守られて穏やかに息を引き取られた由。私どもはここに、その恵みの生涯を信仰をもってしっかりと生きられた島田三枝子さんを、彼女が愛した主の御許へ感謝をもってお送り申し上げたいと存じます。（二〇一五年二月一日、告別式のユーロジイとして）

